

希望の生首

探偵 速水正太郎



ミヤンタケンサク

1 都内 とある日本家屋 庭

大きな樹の上、枝に
腹ばいになる

速水 正太郎。

速水 「よし、いい子だ。

こっちおいで」

速水の目の前、
でっぷりと太った猫が
あくびする。
樹の下で心配そうに
見つめる家主の
遠山 良恵。

良恵 「頑張って！速水さん」

手を伸ばす速水。

速水 「も、もうちょっと．．．」

腕がプルプル震える。
あと数センチ。
ジリジリ、ゆっくりと
猫に這いずっていく。

『ガシっ』。

速水の手が猫を掴む。

速水「よし！」

両手で掴み、手繰り

寄せる。

良恵、嬉しそうに拍手。

コートの中の

スマホが鳴る。

速水「（驚き）うわっ！」

バランスを崩し、落下。

良恵「きゃあっ！」

咄嗟に身を翻し、猫を

抱いたまま仰向けで

地面に叩きつけられる。

速水「ぐへえっ！」

良恵が駆け寄る。

良恵「ちょっと、大丈夫！？」

速水「はは（笑）、大した事

ないです」

上体を起こし、猫を

良恵に渡す。

良恵「あゝよかった！

毎度ごめんなさいね」

速水「いえいえ」

良恵「この子ったら

木に登るのはいいんだけど、

いつも降りられなく

なっちゃうんだから。

困ったもんよねえ」

愛しそうに猫を

ハグする良恵。

速水「はは（笑）。でも、

その都度ご依頼頂けてるので

俺は嬉しいですけども」

良恵「（笑）服、

汚れちゃったわね」

速水「いいですよ、元から

汚れてるみたいなの

モンですから（笑）」

立ち上がり、

2
道

ヨレヨレの

コートの汚れを

払う速水。

良恵「ホント、お前さんは

いい男だねえ」

速水「（笑って）じゃあ後日、

請求書を送らせて

もらいますので」

笑顔で頭を下げ、

腰を擦りながら

門に向かう速水。

良恵は猫の手を取り、

速水の背中に

バイバイする。

腰を擦りながら

歩く速水。

腕時計を見る。

時刻は11時30分。
速水「依頼こないかなあ」

3 古びたマンション

『速水探偵社』の
プレートが貼られた
ドアを開け、とても
片付いてるとはい
えない室内に入っ
てくる速水。
右手にはファース
トフードの袋。
もう一方には幾つ
かの封書（督促状
など）。
ローテーブルの上
にそれらを置くと
コートを脱ぎ、
1人掛けソファに

腰掛ける。
ハンバーガーと
フライドポテト、
コーラを出す。
スマホを取り出す。
電話帳を開き、
画面に指を滑らせる。
ポテトを一つまみ。
スマホを耳に当てた
途端、母の時子の
明朗な声が
帰ってくる。

時子の声「正太郎」

速水「仕事中に掛けてくんなよ」

時子の声「あんたがいつ

仕事してるかなんて

わかる訳ないじゃない。

ていうか、大体暇なんですよ」

速水「（ズキッ）」

時子の声「いつまでそんな

商売やるつもり？

せっかく警察辞めてくれたと

思ったら、変な仕事始めて。

お母さん未だに

意味わかんないんだけど」

速 水「何度も言わせんなよ。

警察辞めたのは、

組織ってのが

性に合わないからだって。

俺は俺だけの信念で

正義を貫くのさ」

時子の声「（呆れて）はあ。

じゃあ、今やってきた

仕事ってなんなのよ？

誰か悪人でも捕まえたの？」

速 水「（ドキッ）こ、困ってる人

を助けたんだよ。

この後、別の依頼

だってあるし」

時子の大きなため息。

時子の声「お母さん、ホント

あんたの事が心配だよ」

速水「心配ないって。じゃあ

忙しいから！」

一方的に通話を

切る速水。

速水「ったく」

ハンバーガーに

ガブリつく。

チャイムが鳴る。

速水「？モゴモゴ（依頼だ）！？」

コーラで流し込み、

玄関へ。

喜んでドアを開けると、

目の前に中年女性、

片山 志保が

立っている。

速水「（驚き）志保さん！」

志保「久しぶり。今、いい？」

速水「もちろん！どうぞ」

速水に促され、足を

踏み入れる志保。

志保「ちゃんと掃除しなさいよ」

少し呆れ顔で

室内を見回す志保。

速水「はは（笑い）、

忙しくて、つい」

ローテーブルの上の

モノをかき集め、

自分が座っていた

ソファの対面、

2人掛けのソファを

志保に勧める速水。

速水「よくココがわかりましたね」

手に抱えたモノを

傍のスチールデスクの

上に置く速水。

志保「鏑木君に聞いたの。

たまに呑んでるんだって？」

速水「ええ」

志 保「彼、今は生活安全課に

いるんでしょ？」

速 水「ええ。この前、酔っ払いを

お仕置きし過ぎて、

また始末書書かされた

みたいですよ」

志保の対面に座る速水。

志 保「（少し笑って）何年ぶり？」

速 水「志保さんが早期退職して

以来だから7、8年？」

志 保「あなたも4年前に

警察辞めたんだって？」

速 水「はい」

志 保「“藤速水”君が探偵かあ」

速 水「その異名やめて

ください（笑）」

志 保「いいじゃない。

私は好きだよ。

藤の花言葉の如く、刑事とは

思えない『優しさ』を

持った男（笑）」

速水「参ったな（笑）」

志保「でも速水君、通すところは

意地でも通すからね。

組織に向いてないから

探偵、いいんじゃない？」

速水「といっても、依頼といえば

家出した中学生の捜索やら

樹から降りれない猫の

保護とかばかりで」

恥ずかしそうに

笑う速水。

速水「で、どうしたんですか？

依頼だったら、

凄く嬉しいなあ」

志保の顔が曇る。

志保「息子を探して欲しいの」

速水「？確か、準君でしたね？」

志保「（頷き）21になったわ」

カバンからスマホを

出し、画面を
操作すると、速水の
前にそれを置く志保。
速水が手にし、見ると

画面には片山準の
写真。

日焼けした肌、
細身ながら筋肉質、
薄く生やした顎髭。

速水「随分ヤンチャにー」
腕には金の時計。

思わず言いかけ、
ハツとすると
口をつぐむ速水。

志保「いいのよ。実際、高校
出るまでは手が

つけられなかったんだから。
父親が早くにいなくなっ
随分寂しい思いさせたから
私、何も言えなくて」

頭を小さく下げ、

スマホを志保に

戻す速水。

志保「でも今じゃ、バイト

しながら真面目に

ボランティア活動

なんかもしていて

随分更生したのよ」

速水「ボランティア？

偉いですね。

どこでやってるんです？」

志保「高尾市」

速水「じゃあ住まいも？」

志保「（頷き）」

速水「いなくなっただのは

いつですか？」

志保「2週間前から連絡

つかなくなってる」

速水「住まいには

行ったんですか？」

志 保「（頷き） 管理会社に

お願いして入ったんだけど」

首を横に振る志保。

志 保「速水君なら分かります

と思うけど警察って成人男性が

いなくなっただ位じゃ

家出人扱いするだけで

実際、何もしてくれない

じゃない？」

速 水「（頷き）」

志 保「そんな時、鏑木君から

あなたの事聞いたの。

優秀な刑事だった

あなたにお願いしたくて」

うやうやしく

頭を下げる志保。

速 水「わかりました」

顔を上げ、安堵の

表情を浮かべる志保。

やがて言いづらそうに

志 保「あの」

速 水「はい？」

志 保「ちなみに料金は

幾らかしら？」

壁に目をやる志保。

貼り紙がある。

『速水探偵社 料金表

【人探し】

・着手金…10万円

・日当…2万円

・+必要経費

・成功報酬』

志 保「……どんな事しても

払うから」

速 水「ああ！これ、前の

ヤツなんですよ」

立ち上がり、貼り紙を

剥がす速水。

速 水「志保さんの頼みですから

格安でやりますよ」

志 保「ありがとうございます」

速 水「じゃあ、準君の事詳しく

聞かせてください」

4 高尾駅（日替わり…朝）

駅舎から出てくる速水。

スマホをコートの

ポケットから出し、

画面に表示された

マップに目をやる。

速 水「徒歩10分か」

目の前のタクシー

乗り場に目をやるが、

速 水「節約節約。最近身体

なまってるしな」

小ぶりなリュックを

背負い直し、歩き出す。

5 準のマンション前へエントランス

やってくる速水。

速水「（見上げて）いいいトコ

住んでんなあ」

エントランスに入る。

管理人室が右手に

見えるが、管理人

らしき人物の姿は無い。

共用の郵便受けへ。

『404』は封書や

チラシで一杯。

エレベーターに

乗り込む。

6 同 4階廊下へ404号室

エレベーターの

扉が開き、

速水が出てくる。

幾つかの部屋を

やり過ごし、

404号室の前に立つ。

チャイムを押す。

速水「いるわけないよね」

隣の部屋から

スーツ姿の30代の

男が出てくる。

速水「あの」

男「？」

柔らかい物腰で

男に近づく速水。

速水「この部屋に住んでる

片山さん、最近

見てないですか？」

男「（素っ気なく）見てないよ」

速水「そうですか」

男「てか、清々してるよ」

速水「？というと？」

男

「うるさいんだよ、しよっちゆうドンチャン騒ぎ

してるみたいでさ。

ここ、それなりに

いいマンションだぜ？

それでも聞こえてくるって

よっほどだよ」

速

水「へえ」

男

「あんた知り合い？なら言っというてよ、迷惑だからさ」

速

水「はあ。わかりました」

男は速水の前から

去ると、

エレベーターに

乗り込み、姿を消す。

それを見送ると

速水はリュックを

背中から外し、

中から小さな

ツールボックスを

取り出す。

更にその中から2つの

ピッキングツールを

手にすると鍵穴に挿し、

カチャカチャ始める。

速
水「よっこら・・・」

この、開け」

カチャカチャ。

速
水「あれ？

久しぶりだから・・・」

カチャカチャ。

先程の男とは

404号室を挟んで

反対側のドアが開く。

速
水「！うげえ、呑み過ぎた」

いきなりドアに

頭をもたげ、

身体を預ける速水。

ドアから出てきた

女性が怪訝な表情を

7
同
中

浮かべながら早足で
速水の背後を駆け
エレベーターへ。
しばし速水の小芝居。
やがて女性は
エレベーターに乗り、
見えなくなる。

速水「ふう」

作業を再開。

速水「開け、この！！」
やっと、『カチャリ』。

ドアを開け、靴を
脱いだ速水は
そのまま廊下を進み、
リビングへ。
速水「・・・広さと家具以外、
ウチと変わらないな」

雑誌や弁当ガラ、
色んなモノが
散乱した室内。
速水は対面式
キッチンへ。
シンクに目をやる。
カラカラに乾いている。
続いて大きな
クローゼットを開ける。
衣服が大量に
ラックされ、
旅行ケースもある。
ベッドへ。
シーツをめくり
手を当てる。
しゃがんでベッドの
下を見る。
テレビボードに
目をやる。
3つに仕切られ、

速水「？」

雑誌などが陳列されている。

使い捨ての

ビニール手袋を

リュックから出し、

両手に嵌める速水。

幾つか雑誌を

手にしては

ラフに眺める。

赤い表紙の手帳がある。

手に取り、

表紙をめくる。

『	2	3	6	4	3	0	』
『	2	3	6	4	3	0	』

以下、似たような

数字の羅列が

綴られている。

ページをめくると同様。
速水「・・・」

数ページ、スマホ
カメラで撮影すると
大きめのジプロックに
手帳を入れる。

8 真久公園

やってくる速水。
園内中央、炊き出しが
行われている。

×

×

×

カレーを紙皿に
盛りつけている
中年女性、
石田陽子と若い女性、
剣崎瞳が列に近づく

速水に目を留める。

陽子「あ。順番なんで」

瞳「並んでくださいねえ」

速水「は？いや、俺は」

困る速水。

ふと目をやると、

陽子らと同じ

ジャンパーを羽織った

初老の男性

ボランティア、

香月明の姿が。

速水「はは（笑）、どうも」

陽子らにペコリと

頭を下げ、列を

離れる速水。

×

×

×

香月の背中を追う速水。

速水「あの」

振り返る香月。

香月「はい？」

速水「私、こういう者でして」

速水がコートから

出した名刺を

受け取る香月。

香月「（見て）探偵？」

速水「はい。こちらで

ボランティアをなさってた

片山準さんの事で

お聞きしたいことが」

香月「もう何日も来てないよ」

速水「ええ。自宅にも戻ってない

様でして。こちらの

ボランティア仲間で

ご存じの方がいないかと

思いました」

香月「私は彼の事は

よく知らないよ」

速水「そうですか」

香 月「彼らなら知ってるん

じゃないかな」

速 水「？」

香月の視線を追うと、

3人の男が

向こうで清掃活動を

している。

速 水「わかりました。

ありがとうございます」

×

×

×

清掃活動を

している若い

男性3人組、

磯野 絢斗と

神田 浩、松丸 宗祐。

宗祐は、遠くで

カレーを振る舞う瞳に

目をやる。

宗 祐「……」

絢 斗「宗祐」

宗 祐「え？」

絢 斗「何、ボ―っとしてんだよ？」

宗 祐「いや」

作業に戻る宗祐。

絢 斗「ったく、かったり―な」

浩 「ああ。で、今度

いつにする？」

絢 斗「準がいなきやな」

宗 祐「……」

そこへ速水が

やってくる。

速 水「すみません」

絢 斗「？なんですか？」

速 水「私―」

香月にした様に

名刺を渡す速水。

3人の表情が強張る。

絢 斗「探偵？」

速 水「はい。片山準さんの事でー」

絢 斗「（遮り）見つかった

んですか！？」

速 水「いえ、残念ながらまだ。

何かお心当たり

ありませんか？」

絢 斗「心当たりって？」

速 水「彼が立ち寄りそうな所とか。

お友達ですか？」

絢 斗「まあ」

速 水「お名前、教えて

頂いてもいいですか？」

顔を見合わせる

絢斗と浩、宗祐。

絢 斗「磯野です」

浩 「神田です」

宗 祐「松丸です」

速 水「お若いのに偉いですね、

ボランティアなんて」

浩 「……準から

誘われたんすよ」

速 水「そうですか。最後に

彼に会ったのはいつですか？」

絢 斗「2週間前です」

浩 「夜、遊びに行く約束

してたんすけど、急用が

入ったつつって、それきり」

絢 斗「何か、嬉しそうには

してました」

速 水「じゃあ、彼の交友関係とか、

ご存じですか？」

浩 「絢斗、知ってる？」

絢 斗「（首を振り）」

速 水「誰かに恨みを

買っていたとかは？」

浩 「どういう意味ですか？」

神妙な表情になる速水。

速 水「何かしらの事件に

巻き込まれた。

そう考えなきやいけない

という事です」

息を呑む3人。

あきらかに様子が

おかしい。

速水「（見て）思い当たるフシ、

あるんですか？」

絢斗「いえ。ないです」

絢斗に同意を求められ、
頷く浩。

速水「君は何か知らないかな？」

宗祐に目を向ける速水。

宗祐「え？と、特に・・・」

速水「そうですか。何か

お気づきの事が

ありましたら、名刺の

番号までお願いします」

頭を下げ、

踵を返す速水。

絢斗「あの」

速水「（振り返り）はい？」

絢 斗「あいつの事、どの位

調べたんですか？」

速 水「え？まだ全然。始めた

ばかりなんで」

改めて頭を下げ、

その場を去る。

が、今度は自分で

立ち止まり、

絢斗たちの元へ戻る。

速 水「ダメ元で聞きますけど、

コレ何かわかります？」

スマホ画面（手帳）

を3人に見せる速水。

絢 斗「……いえ、わかんない

ですね。なあ？」

最後の言葉を浩たちに

投げる絢斗。

宗 祐「……ああ」

宗祐も黙って頷く。

速 水「ですよね（笑）。

失礼しました」

踵を返す速水。

今度こそ3人の

前を去る。

絢斗「やべえぞ」

浩「ああ」

宗祐「・・・」

3人が見つめる先、

速水が別の

ボランティアに

声を掛けている。

9
BARR『EIGHT BIT』前

夕方。

『準備中』の

プレートが

掛かったドアを

開ける速水。

カウンターの途中で

グラスを磨く男、

梶谷 勇悟が

顔を上げる。

梶 谷「探偵さん？」

笑顔で店内に

入ってくる速水。

速 水「先ほどはすみません、

突然電話して」

名刺を受け取り、

自分の対面の席を促す

梶谷。

速水は頭を下げ、

席に着く。

梶 谷「で、片山の事だったよね？」

速 水「ええ。彼は長い事こちらで

働いていたんですよね？」

梶 谷「ああ。前は毎晩入って

くれてたんだが1年くらい前から週2になってね」

速 水「週2？何か別の仕事でも

始めたんですか？」

梶 谷「あまりプライベートに

踏み込むのもアレだから

聞いてないね」

速 水「勤務態度はどうでした？

お客さんとトラブルに

なったとか」

梶 谷は首を横に振る。

梶 谷「真面目にやってたよ。

礼儀もちゃんとしてるし」

速 水「そうですか。

その、シフトが減った頃と

その以前とで

何か変わった事は？」

梶 谷「（考え）着るモノとか

身に着けるモノが

よくなっただかなあ」

速 水「金の腕時計とか？」

梶 谷「ああ、そうそう。アレ、

高いんだよね」

速 水「……彼の住まいは

ご存じですか？」

梶 谷「ああ。○○町のいい

マンションだろ？」

あそこに引っ越した時、

嬉しかったのか自分から

教えてくれたよ」

速 水「それも1年前、ですか？」

梶 谷「ん？そう、そうだね」

速 水「……」

スマホを出す速水。

速 水「これ、わかりますか？」

画面内、数字の羅列に
目をやる梶谷。

梶 谷「（見て）ごめん、

わかんないや」

速 水「そうですか。他に何か

彼に関する事で思い出す事
ありませんか？」

宙に目をやる梶谷。

梶谷「（何か思い出し）そうだ」

速水「？」

梶谷「半年くらい前に、あいつを

〇〇町の雑居ビルで

見かけた事あってね」

速水「雑居ビル？」

何かお店ですか？」

『とんでもない』と

いった風情で

首を振る梶谷。

梶谷「『篠崎エステート』って

いって、夜な夜な怪しい

連中が出入りしてるトコでさ。

叩けば埃が必ず出るところさ。

あいつが何でこんなトコに？

って思ったんだよね」

速水「……………」

梶 谷「儲けてたのも、あそこと

関係あるのかもね。

だとしたら、キナ臭いよね」

速 水「住所、教えて貰えますか？」

1
1 雑居ビル 傍の道（夜）

人気がない路地。

スマホのマップを

見ながらやってくる

速水。

数十メートル先に、

梶谷が言っていた

ビルが見える。

と、背後に気配を

感じる。

速 水「！」

振り返り様、咄嗟に

身を屈める。

同時に速水の頭上、

金属バットの鋭い
スイングが空を切る。

速水「！！！」

速水の右横、
鉄パイプが
縦に振り降り
降ろされる。
後ろ飛びで回避。
その拍子に、
尻もちをつく。

速水「ちょ、待った！」

コートのポケットに
手を突っ込む。
黒づくめの服装、
黒い目出し帽を被った
2人組が勢いよく迫る。
背中のリュックを
投げる。
顔面に食らった
目出し帽②がよろめき、
狼狽える。

立ち上がる速水の

頭を目掛け、

目出し帽①がバットを

横にフルスイング。

『ガキーン！！』

バットが目出し帽①の

手から弾け飛ぶ。

驚き、狼狽える

目出し帽①。

速水の右拳には

ブラスナツクル。

目出し帽②「おい！おめえも

やれよ！」

目出し帽②が声を

やった先、もう1人

黒ずくめ、

目出し帽姿の男がいる。

が、ビビってるのか

動けずにいる。

目出し帽②「ちっ」

1
2

近くの道

速水「……………」

一目散に逃げていく。

3人の目出し帽は

目出し帽①②「！」

警官「おい、何やってんだ！」

向こうからやってくる。

自転車に乗った警官が

速水「もうよせ！」

押さええながら後退る。

左手で脇を

鉄パイプを落とす、

目出し帽②「ぐはああっ！！！」

叩き込む。

右脇下に右拳を

その懐に飛び込むと、

向け振り上げる。

鉄パイプを天に

目出し帽②が迫り、

3人の目出し帽が

駆けてくる。

被っていたモノを

脱ぐ。

絢斗と浩、宗祐だ。

絢斗「浩、大丈夫か!?」

浩は脇の下を押さえ、苦悶の表情。

浩「ちきしょう、あの野郎!」
宗祐を睨む浩。

浩「おめえ、なんで
いかねえんだよ!?

宗祐「ご、ごめん……」
ビビりやがって

浩「ブタ箱行きになっても
いいのかわよ!?

宗祐「……」
絢斗「とにかく今夜は

バラけようぜ。今、3人で

いるのはマズい」

浩 「わかった」

絢斗と浩は宗祐を残し、

それぞれの方向へ

駆け出す。

宗祐も見送ると

2人とは別の方向へ

消えていく。

1
3

真久公園

入り口前

を通りかかる絢斗。

手にした缶ビールを

呷る。

絢斗 「クソがっ」

飲み干した缶を

握り潰し、道端へ

放り投げると

入口向こうの

公衆トイレへ向かう。

目の前、40代の

ホームレスが

寝床を探しているのか、

ウロウロしている。

絢斗「（見て）」

ホームレスは夜の闇に

消えていく。

14 公衆トイレ

小便をする絢斗。

絢斗「ふう」

水も流さず、踵を返す。

絢斗「あ？」

入口に人影。

園内の灯りが差し込み、

ディテールが

わからない。

目を凝らす絢斗。

人影―カーキの

1
5
交番

絢斗「！？」

レインコートを羽織り、顔にはウサギのマスク。その手には大きなグルカナイフ。絢斗「な、なんだお（前）――」言葉を寸断する様にウサギが絢斗を目掛けて、素早い動きで飛び込んでくる。グルカナイフが刺さる。

スチールデスクを挟み、警官から調書を取らている速水。

警官「で、あんたを襲った

3人組に心当たりはない、と」

速水「・・・はい」

ペンを置く警官。

警官「探偵つてのは儲かるの？」

速水「は？いや、俺の場合は

あまり（笑）」

速水のナリをジツと

見る警官。

警官「だろうねえ、その恰好じゃ」

無然とする速水。

警官「住所は都内。

何しにココ来たの？」

速水「人探しです」

警官「人探し？そういうのは

警察に届けなさいよ」

速水「事件性がなきや、まともに

取り合わないでしょ」

今度は警官が

無然とする。

警官「探してるって、

ホームレス？」

速 水「？いえ」

警 官「あ。そ」

速 水「どうしてホームレスだと思っただんですか？」

警 官「え？なんかここ1年くらい

ホームレスがチヨコチヨコいなくなってる様なんだよね」

速 水「・・・炊き出しやってる

真久公園ですか？」

警 官「そう。あそこに長年

居座ってる名物の

おじさんホームレスがいてさ。

その人が何度か

訴えてきてたのよ」

速 水「なんで探さないんですか？」

警 官「そんなの、別の町にでも根城変えてんでしょ。

いちいち相手してらんないよ」

速 水「ほら。まともに

取り合わない」

警官「なに？」

速水「もういいですよね」

立ち上がり、

出て行く速水。

警官「あ、おい」

1 6 ビジネスホテル 外観

1 7 同一室

ベッドに仰向けで

寝転ぶ速水。

スマホが鳴る。

速水「(出て) 志保さん」

志保の声「ごめんなさいね。

どうかかな？ っと思って」

速水「今日は、準君と親しい

人たちに聞き込むので一杯で」

志保の声「そうよね。

そんなすぐには

・ ・ ・ でも、私不安で」

速 水「必ず見つけますから。

心配しないでください」

志 保「ありがとう」

通話を切る速水。

速 水「・ ・ ・ 」

1 8 真久公園 入口（日替わり..朝）

やってくる速水。

入口の向こう、

公衆トイレ周りに

数名の警官、野次馬が。

速 水「？」

1 9 同 公衆トイレ入口

野次馬に紛れる速水。

規制線の向こう、

トイレの入り口は
ブルーシートで覆われ、
警官や鑑識が
出入りしている。
傍にいる男、

市川 雅に
目をやる速水。

速 水「あ。何が

あったんですか？」

市 川「どうやら、殺人事件

らしいよ」

速 水「？被害者は？」

市 川「（首を振り）たださ、

聞いちゃったんだよ」

速 水「何をですか？」

市 川「刑事たちが話してんのを

たまたま耳に

入っちゃったんだけど、

死体に首が無いみたいなんだ」

速 水「首が無い？」

鑑識員の手により、
ストレッチャーが
運び出される。
その後が続いて、
高尾署の刑事、
岩本と須永が出てくる。
規制線を潜り、車輛の
方へと歩いていく。

×

×

×

野次馬から離れた所で、
騒動を見ている
女性ホームレス、
戸川 絹江。

絹

江

「

・

・

・

・

」

×

×

×

速

水

「

あ

の

」

入口付近、
警察車輛に

乗り込もうとする

2人の刑事が振り返る。

岩本「あ？」

速水「私、こういう者でして」

名刺を2人に渡す速水。

岩本「（見て）探偵？」

速水「はい。事件の事で

お聞きしたくて」

岩本「部外者に話せる訳ねえだろ。

何が起きたかは、秘密だ」

速水「あれ？でも死体には首が

無いんですよね？」

岩本「なに？」

速水「みんな知ってますよ。

（しれっと）被害者、有名人

なんですよね？」

須永「え？先輩、あの磯野って

被害者（マルガイ）有名人

「なんですか？」

岩本「バカ！」

須永を小突く岩本。

気づくと、速水はもう

いない。

岩本「あ！？」

20 同 園内

歩く速水。

速水「磯野 絢斗……」

×

×

×

絢斗「あいつの事、どの位

調べたんですか？」

×

×

速水「……」

男の声「見ない顔だな」

速水「？」

背後に中年の男性

ホームレス、

石黒 新太が

立っている。

昏い目で速水のナリを

ジッと見る新太。

新太「新入りか？」

速水「（ため息）いや、俺は」

新太「年もまあ、若そうだな。

あまりこの辺ウロチヨロ

しない方がいいぞ」

速水「？もしかして

名物おじさん？」

ギロリと速水を

睨む新太。

新太「あ？なんだ、そりゃ？」

速水「あ、いえ。この公園で

人がいなくなってる、

ってのを警察に

訴えてる方ですよね？」

新

太「ああ、そうだ。

だけど警察は俺ら

みたいのが消えようが

どうでもいいのさ」

歯軋りする新太。

速

水「いつぐらいから、

人がいなくなっちゃって

るんですか？」

新

太「1年前くらいだな」

速

水「（考えて）」

新

太「さっきのトイレの事件は

死体があったが、

俺らの仲間は死体なんか

残してない。

存在そのものが

神隠しに遭ったみたいに

消えちまうのさ」

速

水「・・・」

ふと目をやると、
離れた場所に
香月が突っ立っている。
彼の視線を追うと、
高台の入り口が。
『立ち入り禁止』とある。

速 水「？」

やがて、香月は
その場を去る。

新 太「気になるのか？」

速 水「え？ まあ、なんとなく」

新 太「あの上じゃ『逆さ帚』が

あるんだ」

速 水「逆さ帚？」

新 太「くだらねえ都市伝説さ。

お、話してる先から」

新太が顎をしゃくる先、
野次馬から少し
離れた場所を
歩いている絹江の姿が。

新

太「詳しく知りたきゃ、

絹江さんに聞きゃあいい」

そう言っつて新太は

その場を去る。

×

×

×

速

水「あの」

絹江が怪訝な表情で

振り返る。

絹

江「なんだい？」

速

水「この公園に『逆さ帚』って

あるんですよね？

それって何なんですか？」

絹

江「何で知りたいんだい？」

速

水「いや、ちよつとそういった

モノに興味がありました」

『しようがない』と

いった風情で口を開く

絹江。

絹

江「高台の上に大きな樹が

あるんだ。その樹の下に人間の頭を4つ埋めると、自分の大切な人が生き返るんだ」

速

水「4つの頭を埋める？」

絹

江「（頷き）昔、男が首を

刎ねられて殺されたんだ。

けど、その首は

見つからなかった。

恋人の女は、犯人たち

4人の頭をあの木の下に

埋めたのさ」

思わず笑う速水。

絹江は無然とする。

絹

江「何がおかしいんだい？

興味があるって言うから

教えてあげてんだ」

速

水「すみません。ただ、

4て縁起悪い数字だなあって」

絹

江「死ぬの『4』（し）」

だからかい？縁起のいい
数字としても使うだろ？」

速

水「？」

絹

江「4つ葉のクローバーを

見つけると幸せになるって

いうだろ？

4はし（死）を連想させる、

なんてのはダジャレの極み

じゃないか。

彼女にとっては

良い数字だったんだよ」

速

水「・・・日本では

陰陽師とかだと、

偶数は割れるから

縁起悪いとか言いません

でしたっけ？」

絹

江「食い下がるね、あんた。

じゃあ、なんで日本は

『四季』なんて、季節を

同 高台入口

4つに分けたのさ？」

速 水「（ズキッ）・・・で、

その女性の念願は

叶ったんですか？」

絹 江「もちろん」

妙に自信満々な絹江。

絹 江「木っていうのは太古の

昔から聖なるモノと

して崇められていて、

『逆さ帚』もその伝説以来、

『命を宿す木』として

信奉されてんだ」

速 水「命を宿す・・・」

絹 江「あたしもいずれ・・・」

速 水「え？」

絹江は答えず、

その場を去る。

速 水「・・・」

『立ち入り禁止』の

看板。

その向こうに山道が

続いている。

辺りを見回し、

看板を超え

登っていく速水。

×

×

×

速

水

「ぜえ、ぜえ・・・」

「やっぱ、なまってるなあ」

息を切らしながらも

しっかりした足取りで

登っていく。

×

×

×

『倒木の恐れがある為

この先、進入禁止』
木と木に渡らせた
ロープにプレート。
意に介さず、それを
跨ぐ。
高台の中央、
大層な樹齢であろう
大木がある。
葉を持たず、
枝木だけのその姿は
正に箒を逆さに
した様。

速 水「（見惚れて）確かに、
神々しいっていうか、
なんていうか」

樹の下へ歩を
進める速水。
樹のたもと、土が
歪に盛り上がっている。

速 水「？」

微かに異臭がする。

速 水「！おえっ」

辺りを見回す。

雑木林に目をやり、

そちらに歩を進める。

大小様々な枝木を

掻き分ける。

その先に

不法投棄された

（1人用）ロッカーが

倒れている。

同時に強烈な異臭が

鼻をつく。

速 水「！」

ポケットから出した

ハンカチを鼻口に当て、

顔をしかめながら

近づく。

ロッカーのドアの

周りには黒紫色に

変色した血が
付着している。
ノブに手を掛ける。
呼吸を止め、一気に
引き開ける。
中を見た速水の
目が剥かれる。

速水「！！！」

すぐさまドアを
閉めるとその場を
離れる。
地面に四つん這い
なり、胃の中のモノを
吐き出す。

速水「げえええっ！」

頭上に気配を感じる。

速水「？」

カーキ色の
レインコートを羽織り、
ウサギのマスクを

被った人間が速水を
見下ろしている。
その手には
グルカナ이프。

速水「！！！」

ウサギがナイフを一閃。

速水の額が真一文字に
裂ける。

速水「ぐはっ！」

大量に流れる血が
視界を奪う。
咄嗟にポケットに
手をやる。
微かにぼんやり
見える速水の視界。
ウサギがナイフを
袈裟懸けの様に
振り降ろす。
それを間一髪躲す速水。
ウサギの胸ぐらを

掴むと、そのまま
立ち上がり、
闇雲に突き飛ばす。
“ブチッ”。
速水の右掌に、離れた
ウサギの衣服から
何かが。
速水はヨロヨロと
駆け出す。
ロクに見えも
しないのに
後ろを振り返る。
ウサギが追ってくる。
駆ける速水。
足を踏み外す。
そのまま斜面を
転げ落ちる。
速水「うわあああっ！」
身体を強く
打ち付ける。

速水「ぐはっ！」

仰向けで倒れる速水。

右手には薄紫色を

した花のブローチ。

『どうした？』

『何だ今の！？』

人々の声が聞こえる。

速水はそのまま、

気を失う。

2
2
病院 病室（2日後）

4人部屋の一角。

ベッドの上、速水が

ゆっくり目覚める。

速水「・・・母さん」

ベッドの傍ら、

スツールに座る時子が

安堵の息を吐く。

時子「このまま目を

覚まさないのかと思った」

自分の頭に巻かれた

包帯に気づく。

同時に身体中の痛みを

自覚する。

速 水「（ため息）なかなか重症だ」

時 子「頭部裂傷と全身打撲。

骨折とかなくてよかったわ」

速 水「はは（笑）」

時 子「何があったの？」

速 水「・・・調査中に

襲われました」

シユンとする速水。

時 子「もうやめなさい。

そんな危ない仕事」

速 水「いや、刑事やってても

ありえる事だから」

時 子「警官なら“死亡退職金”

とか出るけど、しがない

探偵なんかには出ない

じゃない」

速 水「あのねー」

立ち上がる時子。

時 子「とにかく。お母さん、もう

許さないから。荷物まとめて

田舎戻って来なさい」

速 水「いや、ちよっとー」

時子は出て行く。

速 水「なんだよ。ったく」

同室の老人、

田島義郎が

戻ってくる。

田 島「お！兄ちゃん目覚めたか？」

速 水「はは（笑）。どうも」

田島、ベッドに

入りながら、

田 島「あなたのお母さん、

この2日間、面会時間は

ずっと、あなたの傍に

いたんだぜ」

速 「？」

田 島 「何があったか知らねえけど

あんないい母親、

泣かせちゃいけねえよ」

速 「え？」

田 島 「今、トイレから戻るとき

すれ違ったけど、泣いてたぜ」

速 「・・・」

2
3
同 屋上

ベンチに腰掛ける

速水と志保。

志 保 「よかった。連絡つかない

から心配してたのよ」

速 水 「すみません」

志 保 「何があったの？」

逡巡する速水。

その表情を汲む志保。

志 保 「あの子の事、

志 速
 保 水
 「 ・ ・ ・ ・ ・ すみません
 犯人の目星は
 ついてるの？」
 ×
 ×
 ×

フラッシュ。
 ロツカーの中の、
 干乾びた首の無い死体。
 その手首には、
 写真にあった
 金の腕時計。

速 志 速
 水 保 水
 「 ・ ・ ・ ・ ・ わかったのね？」
 「 何があったの？」
 「 言って頂戴。」

×
 ×
 ×

速

水「いえ。けど、犯人は必ず俺が捕まえますから」

志保はふらりと

立ち上がると、

その場から去る。

速

水「志保さん！」

速水はどうする事も

出来ない。

速

水「・・・」

2

4

同（時間経過）

ベンチに座る速水。

目の前に、高尾署の

刑事、岩本と須永が

立っている。

岩

本「探偵さん。あなたの

通報通り、真久公園に

行ったが死体なんか

なかったぞ」

速 水「え？」

岩 本「夢でも見たんじゃ

ねえのか？」

速 水「俺、見たんですよ！

で、この有様に！」

須 永「でも、ないモノは

なかったんですよ」

岩 本「だから俺らは動きようが

ねえ。まあ、その怪我だ。

大人しくしとけ」

岩 本は須永のモノと

一緒に名刺を速水の

傍らに置く。

岩 本「もし、なんかあったら

連絡しろ」

岩 本と須永が

去って行く。

速 水「……」

田島「年取ると、便所近くて田島が戻ってくる。」

かなわねえな。ーん？」

視線の先、

無人（速水）の

ベッド。

2
6 真久公園 高台

周囲を警戒しながら

雑木林にやってくる

速水。

ロッカーへ近づく。

中には何も無く、

周囲に血痕も無い。

速水「・・・」

×

×

×

速

水

「
・
・
・
」

×

速水は逆さ帯に
目をやる。
樹のたもとが
歪に盛り上がって
いるが、以前見た時と
違う。

×

×

男

「死体に首が無い
みたいなんだ」

×

×

×

フラッシュ。

×

×

×

フラッシュ。
首の無い準の死体。

フラッシュ。

かおる「人間の頭を4つ埋めると

自分の大切な人が生き返る

って話さ」

×

×

×

逆さ帚のたもと、土を掘り起こす速水。

速水「（見て）」

何もない。

速水「・・・」

×

×

×

警官「ここ1年くらい

ホームレスがチヨコチヨコ

いなくなってる様なんだよね」

速水「・・・」

×

×

×

27 同 山道（高台入口）

山道を降りる速水。スマホを取り出し、ある番号に掛ける。数コールして、
速水 毅士の野太い声が返ってくる。

速水「高尾市にある」

『篠崎エステート』って

会社について調べて

くれないか？」

速水「先輩。俺、減給食らって

んすよ？余計な仕事してる

場合じゃないんすけど」

速 水「志保さんからの依頼で

動いてる」

鏑木の声「依頼？何の？」

速 水「それは追って話す。

とにかく急ぎで頼む」

鏑木の声「わかりました」

通話を切る速水。

高台入口に

やってくる。

速 水「？」

視線の先、宗祐と

瞳が向き合って何か

話している。

速 水「あいつ」

やがて、瞳は

宗祐に頭を下げる。

速水が近づく。

が、宗祐はそれに

気付かず、

やりきれない

感じでその場を

去って行く。

速水「あ」

宗祐を見送った

瞳が速水に気付く。

瞳「あ。こんにちわ」

速水「こんにちわ」

瞳「今日は炊き出し、

ありませんよ」

速水「・・・」

「どうしたんですか？その頭」

速水「ちよつとね。さっきの彼、

何かあったの？」

瞳「え？」

速水「あ、ごめん。覗き見

する気はなかったんだけど、

つい目に入っちゃってね」

瞳が肩に掛けている

トートバッグに

目を留める速水。

速 水「・・・綺麗なお花だね」

トートバッグに
薄紫色をした花が
挿さっている。

瞳 「え？・・・さっき来る

途中で。好きな花なんで
摘んできちゃいました」

速 水「・・・」

瞳 「どうしました？」

我に返る速水。

速 水「ああ、ごめん。さっきの彼、

なんか揉めてたみたいだけど」
口詰まる瞳。

瞳 「・・・付き合っ

てくれないか？って

言われました。それで、
お断りを」

速 水「そう」

速水は名刺を差し出す。

瞳 「（見て）探偵さん？」

速 水 「ええ」

瞳 「何か調べてるんですか？」

速 水 「まあ」

瞳 「もしかして、片山さんが口詰まる速水。」

瞳 「最近姿見せない件ですか？」

速 水 「……ええ」

瞳 「みんな心配してるんですけれどね」

速 水 「……こちらは長いんですか？」

瞳 「私は3か月前からです」

速 水 「そうですか」

瞳 「あの。なんなんですか？」

速 水 「いえ、大した事じゃ」

瞳 「清掃道具を持った陽子が遠くで手を振っている。」

瞳 「はーい」

陽子 「瞳ちゃん。行くわよ」

瞳 「はーい」

速 水「（見て）あの人もここに

来て、君と同じくらい？」

瞳 「陽子さん？私に来て

ひと月後くらいですかね」

速 水「そっか」

リュックから

赤い手帳を出す速水。

速 水「ごめん、最後にこれ

見てくれるかな？」

手帳を瞳に

受け取らせる。

瞳 「（見て）・・・わかん

ないですね」

速 水「そっか、ありがとう」

瞳 「それじゃ」

手帳を速水に返し、

その場を離れる瞳。

その後ろ姿を

見送る速水。

ポケットから

ブローチを出す。

速水「同じ花……」

2
8
道

コンビニ袋を提げた

浩が歩いている。

前方から絹江が

やってくる。

浩「？」

絹江はすれ違いざま、

絹江「報いを受けるがいいさ」

浩「！！」

絹江は何事も無かった

様に去って行く。

浩「……」

2
9
浩のマンション前

浩がやってくる。

速水の声「やあ」

浩「！？」

振り返ると速水が

立っている。

浩「な、なんすか？」

速水がおもむろに

浩の右脇を突つつく。

浩「ぐっ！」

苦痛に顔しかめる浩。

速水「（笑って）」

浩「！！」

狼狽えるが虚勢を

張る浩。

浩「な、何すんだよ！いきなり」

速水「宗祐君、彼は見かけたけど

もう1人、磯野君は？」

浩「！」

速水「ニュース見たんだね？」

浩「・・・」

速水「これを偶然だなんて俺は

思わないよ。君の近しい人間が短い期間で2人亡くなってるんだから」

浩 「？」

尋ねる様な浩の表情。

速 水「・・・ああ。準君も

亡くなってる」

浩 「！！」

息を吐き、

マンションを見上げる

速水。

速 水「磯野君のマンションにも

行ってきた。

準君もだけど、いいトコ

住んでるね」

浩 「！！いいいだろ！」

速 水「知ってる事、話して

くれないか？」

浩 「！何を？なんの事か

わかんねえよ」

浩の身体は

ガタガタ震えている。

速

水「俺が準君の事を調べてる

事を知った途端、君らが

襲ってきた。何か知られたく

ない事があるんだろう？」

浩

「・・・」

速

水「君らが俺を襲った近くに

ある雑居ビル、

『篠崎エステート』に準君は

出入りしていた。

君らもだね？」

浩

「（ドキッ）！！」

速

水「君らは誰かに恨まれてる。

正直に話すんだ。

でないと君も彼らと

同じ目に遭うぞ」

浩

「！！！！」

し、知らねえよ！

勝手に変な詮索すんなよ、

警察呼ぶぞ！」

浩はマンションの
中に駆け込んでいく。

速水「……………」

30 雑居ビル 傍の道（夕）

ガードレールに
凭れている速水。

そこへ、ミニが
やってきて

運転席から、大柄で

屈強な身体の男、

鏑木 毅士が窮屈

そうに降りてくる。

速水「鏑木。悪いな」

鏑木「いえ」

速水のナリを見て

眉を顰める鏑木。

鏑木「どうしたんすか、その頭？」

速 水「これについても後で話す。

で、調べてくれた？」

鏑 木「はい。『篠崎エステート』

ってのは元々八王子辺りで

ブイブイいわせてた

篠崎巧三ってのが

始めた会社です。

エステートなんて

謳ってるけど、噂じゃ

不動産だけじゃなく

裏の仕事にも手を出してる

みたいですね」

速 水「裏、ね」

右方に目をやる速水。

視線の先には雑居ビル。

速 水「10分経ったら来てくれ」

鏑 木「は？」

速水はビルに向かって

さっさと行ってしまふ。

鏑 木「先輩！」

3
1
同
前

やってくる速水。
入口にある
案内プレートには
『篠崎エステート』
のみ。
速水は中に入る。

3
2
同
篠崎エステート

ドアを開ける速水。
社内にいる4人の強面
男が一斉にこちらを
見る。
立ち上がる
4人の男たち。

速水「こんにちは」
男①「なんだお前？」

速 水「探偵です。社長さんは
います？」

怪訝な表情を浮かべる
4人の向こう、
デスクで帳簿を
見ていた男、
篠崎 巧三が
顔を上げる。

篠 崎「俺だ。探偵なんぞが
何の用だ？」

速 水「いえ、家宅搜索しようと
思いました」

篠 崎「あ？」
男たちも顔を
見合わせる。

篠 崎「令状は？てか、そもそも
探偵なんぞにそんな
権利ねえだろうが！」

速 水「まあ、この場合
緊急措置というか。

ま、こちらは叩けば必ず埃が出るって聞いてるんで何かしら出るでしょ？」

男たちが各々、物騒な道具（武器）を手にする。

速水「ほら。そんな物騒なモノ、普通の会社にはないでしょ」

篠崎「うるせえっ！怪我人がよお。もっと傷だらけにしてやんよ」

煙草を啜え、火を点けると顎で男たちに指示する篠崎。

速水「おい、出番だぞ」

背後をこなす速水。

篠崎たち「？」

速水の背後に鏑木が現れる。
たじろぐ篠崎たち。

鏑木「（ため息）実力行使

「させんすか？」

速 水「そ。でも、最初から

お前がいたらこの連中、

本性見せてくれないからさ」

鏑 木「はあ。じゃあ、下がってて

ください」

速 水「悪いな、身体バキバキでさ」

篠 崎「！凶体デケエくらい、

なんだったんだ！

行け、オラ！！」

篠崎の激を受け、

男④が真っ先に

襲い掛かる。

鏑木が丸太の様な腕を

素早く突き出す。

男 ④「ぐはっ！」

正拳を顔面に食らい、

勢いよく吹っ飛ぶ男④。

他の男たちは

怯んで固まる。

篠崎は唾えた

煙草をポロリと落とす。

鏑木は人が変わった

様に冷たく挑発的な

眼を篠崎たちに向ける。

鏑

木「警察に喧嘩しかけ

やがったな？

公務執行妨害だ」

固まる篠崎たち。

×

×

×

男たちが床に

突っ伏している。

鏑

木「半グレの大将、

お前はこねえのか？」

鏑木に見据えられた

篠崎は蛇に睨まれた

カエル状態。

速水は篠崎の元へ。

速 水「片山準って名前、

わかるね？」

篠 崎「！」

速 水「ここに出入り

していたよね？何者かに

殺されたよ。友達の

磯野絢斗も」

篠 崎「？」

速 水「彼らに何をやらせてた？」

速水から顔を外す篠崎。

鏑 木「なんすか？この仕入れ表

みたいなのは？」

篠 崎「！！！」

鏑木が帳簿を

ペラペラ捲っている。

ページには

年月日・年齢が

記されている。

速 水「？」

スマホを出す速水。

速 「見せて」

楠木に帳簿を

見せてもらう。

画面（の数字）と

照らし合わせる。

『 2 3 4 3 0 』

『 2 3 6 4 0 』

速 水 「2023年4月、30代」

それ以外も多くの

部分の数字が

共通している。

速 水 「（考えて）もしかして、

人身売買してる？」

篠 崎 「！！」

速 水 「身寄りの無いホームレスを

攫ってブローカーに捌いてる」

篠 崎 「・・・証拠は！？

そんな帳簿が

なんだってんだ！

鏑木「これは何だ？」

鏑木がロッカーから

出した

アタツシユケースを

開けると、白い粉が

入ったパッケージが大量に

詰まっている。

篠崎「・・・」

速水「やっぱ、叩けば叩くほど

色々、埃が出るね」

篠崎「こゝんなゝ令状（フダ）

も持たねえガサ入れが

許される訳ねえだろ！

証拠能力はねえぞ！！

お前らが仕込んだのかも

知れねえじゃねえか！！」

速水「だね。まゝ俺は今ここで

あんたらを逮捕する為に

来たんじゃない」

篠崎「？」

速「でも、これで警察は正式にこの会社に入内偵を入れる事になる。もう下手な事は出来ない」

篠崎「！」

速「さっさと廃業する事だね」

篠崎「・・・」

速「あんたらが攫った項垂れる篠崎。」

速「あんたらの詳細な人たちの詳細なデータとかは？」

篠崎「・・・そんなモンねえよ」

速「だろうね」

3
3
走るミニ車内（夜）

ハンドルの握る鏑木が隣の速水を見もせず口を開く。

鏑 木「で、人身売買に

絡んでたガキどもの死が、

うさん臭い都市伝説に

絡んでる、と」

速 水「・・・ガキども、の

1人は志保さんの息子だ」

鏑 木「え！？志保さん、

知ってるんすか？」

速 水「・・・ああ」

鏑 木「シヨックでしょうね」

速 水「・・・犯人は、彼らに

攫われた誰かの身内だろう」

鏑 木「はあ。でも、

もし犯人（ホシ）が、

人の首を埋める事で

誰かが蘇るなんて

まやかしを信じてんなら、

かなり気が触れた奴ですね」

速 水「いや、単純に気の触れた

人間の犯行じゃない。

俺を襲った後、死体を

綺麗さっぱり

片付けてるんだから」

鏑 木「まともな奴なら尚更、

そんな馬鹿馬鹿しい事に

心酔すんのはなんでですか？」

速 水「わからない」

3
4 速水のマンション前（夜）

ミニが停車し、速水が
降りる。

速 水「サンキュー、悪かったな」

鏑 木「ま、減給食らった

ストレスは発散出来ました」

速 水「じゃあさ、このまま俺の

助手やらない？」

鏑 木「勘弁してくださいよ。

忙しいのにわざわざ

来たんすよ？

これ以上探偵ごっこ

付き合ってたなら、

減給されまくって

給料無くなっちゃいますよ」

速 水「（笑って）わかったよ」

鏑木の表情が陰る。

鏑 木「志保さんは？息子さんの

死を知っちゃまって

どうしてます？」

速 水「・・・連絡つかないんだ」

鏑 木「まあ、しょうがないすよね。

俺からも様子みて

連絡してみます」

速 水「頼む」

ミニが走り去っていく。

そして指紋検出用具。
使い捨てビニール
手袋を嵌める速水。
手帳にアルミニウム
粉を付け、羽毛の
刷毛で指紋部分以外の
粉を払っていく。
そしてそれに、透明の
転写シートを貼り、
転写する。

×

×

×

ブローチにも同様の
作業を施す。

テレビを見ながら
グラスを呷る浩。

浩 「殺られてたまっかよ」

手にする。

ポケットナイフを

ローボード上の

逡巡するが、やがて

浩 「・・・あのババアが？」

×

×

×

絹 江 「報いを受けるがいいさ」

×

×

×

浩 「・・・」

ウイスキーボトルは空。

浩 「ちっ。もうねえのかよ」

ふらついた足取りで

やってくる浩。

辺りを見回す。

浩 「？」

視線の先、絹江が

出口に向かって

いくのが見える。

浩 「・・・」

3
8 人気のない夜道、廃墟ビル

歩く絹江の背中。

距離を置き、後を

尾ける浩。

辺りを窺い、周りに

人がいないのを

確認すると駆け出す。

絹江が何事かと

振り返る。

絹江 「！？」

ポケットナイフで
絹江を切りつける浩。

絹江「ぎゃっ！！」

浩「騒ぐな、ババア！！」

絹江の袖を掴み、
道路沿いの廃墟ビルに
放り込む浩。

倒れ込んだ絹江は
慌てて起き上がり、
コンクリ打ちっぱなし
の階段を這いずり
上がっていく。
浩は後を追う。

絹江は2階に出る。
1フロア全てテナント
使用の広い空間。
浩もやってくると
尻もちをついて
こちらを見ている
絹江の元へ。

浩 「準や絢斗を殺りやがって」

絹江は何も答えず、
ゆっくり立ち上がる。

浩 「こいよ！」

3 9 都内 池山署 外観

(日替わり..朝)

4 0 同 鑑識課

ドアを開け、
入ってくる速水。

パソコンに向かって

いる鑑識員、

小 渕 康博が

顔を上げる。

小 渕 「あれ？速水さん、

お久しぶりです。

どうしたんですか？」

速 水 「周いる？」

仕切りの向こうを
指差す小湊。
大層なイビキが
聞こえる。

小湊「ついさっき、作業終わって

オチてますけど」

速水「ありがとう」

仕切りの向こうへ
行くと、ソファに
横になり、大口を
開けて眠っている
鑑識員、高島周。

速水「周、起きろ」

ムニヤムニヤする
だけで起きる
気配はない。

速水「あ！姫野萌香ちゃんだ！」

飛び起き、
立ち上がる高島。

高島「ど、どこどこ！？」

萌香ちゃん！

ずり落ちたメガネを
直し慌てふためく。
が、目の前の速水を
見てため息。

高島「先輩。何なんですか？

いきなり」

速水「これ、照合してくれる？」

2つのパッケージを高島に
差し出す速水。
中にはそれぞれ
転写シートが
入っている。

高島「勘弁してくださいよ、
2日寝てないんですよ」

高島は受け取りもせず、
ノックアウトされた
ボクサーの様に
ソファに倒れ込む。
速水はしゃがみ込み、

高島に顔を近づける。

速水「（小声）3か月前、

本店と合同で大規模捜査

してる時、仮病使って

萌香ちゃんの握手会

行ったんだって？」

目を見開き、

再び起き上がる高島。

高島「どうしてそれを！？」

速水「古巣だぜ？黙ってても

情報は入ってくるんだよ」

高島「誰ですか！？密告

（チンコロ）した奴は！！」

速水「守秘義務があるから

それは言えない」

高島「な！？ま、待てよ。

あの事知ってるのは

えくと・・・」

指を折り、

数え始める高島。

速

水「じゃあ、急ぐから。」

結果出たら教えてくれ」

速水は悔し顔の

高島にパッケージを渡し、

出て行く。

4
1

高尾駅 前

駅舎から出てくる速水。

サイレンが響く。

音の方に目をやると

パトカーが数台、

速いスピードで

駆け抜けていく。

速
水「？」

4
2

雑居ビル 前

やってくる速水。

視線の先には

多くの野次馬。
その先、規制線の
向こうには
パトカーや救急車、
ビルを出入りする
警官らが。

市川「おい」

速水「？」

速水が目をやると、
野次馬男、市川が
やってくる。

市川「また会ったねえ」

速水「もしかして、また」

市川「ああ。殺しみたいだよ」

市川が辺りを
窺いながら
声を潜める。

市川「警官の話を目撃させて

聞いてたんだけどさ、
どうやら今回も死体に

首が無いらしいんだよ。

怖いよね」

速 水「！」

市 川「さ・ら・に」

速 水「？」

市 川「今回はなんと、もう1つ

死体があるみたいなんだ」

速 水「！それも首が？」

市 川「いや、首が無いのは

1つだけみたい」

速 水「・・・」

ビルの中から

岩本、須永刑事が

規制線を潜り出てくる。

速 水「岩本さん」

速水が2人の刑事に

駆け寄る。

岩 本「（気づいて）なんだ、

あんたか？病院は？」

速 水「いやあ、大した事無いんで

抜け出してきちゃいました」

呆れる2人の刑事。

速 水「また、首の無い死体が

出たって本当ですか？

そうでない死体も

もう1つ出たって」

岩 本「！？なんでそれを？」

速 水「野次馬のみんな

知ってますよ」

岩 本が須永を睨む。

岩 本「須永！また

情報漏れてんじゃないか！

どうなってるんだ！？」

須 永「す、すみません！」

岩 本「その辺の制服（警官）

含めて情報統制

しっぴかりやれ！」

須 永「わかりました！」

須永は慌てて規制線の

向こうへ戻っていく。

速 水「これで俺の言った事が

ガセじゃないって

わかってくれましたよね？」

岩 本「どうだか。あんたの話は

死体が出ねえ限り、こっちは

何も動かねえよ」

速 水「篠崎エステート、調べて

くれましたか？」

岩 本「ああ。あんたの報告通り

真っ黒けだ。今後も

目え光らす。だがな、

それがあんたの見た

死体と繋がる確証はねえ」

速 水「（サラリと）にしても、

なんで神田君がこんな目に？」

岩 本「それをこれから調べんだよ」

言っただけとやる岩本。

岩 本「お前、何で名前を！？」

速 水「当たってました？それじゃ」

速 水は足早に

その場を去る。

岩本「あ、おい！」

4
3 宗祐のマンション前

帽子にマスク姿の

宗祐が辺りを

窺いながら出てくる。

速水「買い物かい？」

宗祐「！」

目の前に速水が

立っている。

足を止めるが、

再び早足で速水を

やり過ぎそうとする。

すれ違う刹那――。

速水「君らがやってた事、

わかったよ」

宗祐「！！！」

真横で硬直する宗祐に

目をやる速水。

速水「神田君もやられた」

宗祐「！！！」

4
4
同 宗祐の部屋

ローテーブルを挟み、
対面で座る速水と宗祐。

宗祐は項垂れている。

宗祐「準に誘われたんです。

ホームレスなら身寄りが

なくて面倒な事にならない、

って」

速水「ターゲットを漁る為に

君らもボランティアの

バイトをしてたんだね？」

頷く宗祐。

宗祐「俺は、ホントは

嫌だったんです。

でも、断れなくて……」

その言葉を見回す速水。

部屋を見回す速水。

サイドボードの上の

写真に目を留める。

速水「随分、謝礼貰ってるんだね」

写真の中、

準・絢斗・浩・宗祐が

潇洒な建物の前で

笑っている。

建物をバックにした

写真がいくつもある。

速水「別荘も買えちゃってる

わけ？」

宗祐「まさか」

速水「よく行ってるみたいだね」

宗祐「・・・山中湖の

貸別荘です。」

速水「人を攫った金で、か」

目をギュッと閉じる

宗祐。

速 水「君らが攫ったのは

ホームレスだけなんだね？」

宗 祐「？」

速 水「ホームレスじゃなく、

ちゃんと身寄りのある人間を

攫ったりとかは？」

宗 祐「それはないです」

速 水は立ち上がる。

宗 祐「！俺はどうすれば」

速 水「君らがやった事は

許されない事だ。

どうすればいいかなんて、

わかるだろ？」

宗 祐「！」

身体を震わせる宗祐。

速 水「準君たちを殺した

人間はまだ捕まえる事が

出来てないんだ。

どのみち、このままじゃ

君は狙われる」

宗 「！！！」

速 水 「後悔してるんだろ？」

なら償わなきゃ一生

それは拭えないよ」

宗 祐 「・・・わかりました」

速 水 は小さく頷き、

出て行く。

4
5 真久公園（昼）

辺りを見回しながら

やってくる速水。

新太の後ろ姿を

見つけ、近づいていく。

新 太 「こんにちは」

怪訝な表情で

振り返る新太。

新 太 「ああ、あんたか。

まだいたのか」

速水の頭の包帯に

目をやる新太。

新太「高台に行つて、

転げ落ちたんだろ？バカだな」

速水「知ってるんですか。

参りましたよ」

新太「この公園で俺の知らない

事はない」

速水「だから聞きたい事が

ありました」

コンビニ袋を

掲げる速水。

×

×

×

ベンチに腰掛け、

コンビニおにぎりを

食べる速水と新太。

新太「この数か月でいなくなつた

人間の名前？ああ、

全員覚えてるよ」

速

水「！教えてください」

おにぎりを啜えたまま

メモを取り出す速水。

×

×

×

何名もの名前が

書き綴られた

メモ帳のページ。

速

水「この教えて頂いた

方々ですが、帰る場所が

あるにも関わらずここに

居着いていた方とか

いますか？」

新

太「そんな奴はいないよ。

みんな1人ぼっちさ。

リストラされて家庭崩壊した

奴、働き過ぎてメンタル

やられて全てから逃げ出した

奴、色々な奴がいるけど

みんな1人ぼっちさ」

速 水「・・・」

ペットボトルのお茶を
口に運ぶ速水。

新 太「（大声）あ！」

盛大に吹き出す。

速 水「ちょ、どうしました？」

新 太「1人、忘れてた」

速 水「誰です？」

新 太「（首を振り）名前は

知らないが、若い男で。

3か月前、少しの間ここに

いたんだ」

速 水「その男性の名前、

知ってる人いませんか？」

4
6 同 入口（時間経過）

香月がやってくる。

香 月「？」

4
7
道

前方から速水が
やってくる。

速水「どうも」

香月「何の用だい？」

速水「3か月前、こちらに

若い男性がやってきて

しばらくの間、寝泊まり

していたそうですね。

で、あなたが親身に

なっていたそうで

速水「お名前、教えて

頂けませんか？」

香月「名前は知らない」

香月は速水を

やり過ごし、園内へ。

速水「・・・」

歩く速水のスマホが

鳴る。

速 水「（出て）周」

4
8 池山署 鑑識課

デスクに座り、
スマホを耳に
当てている高島。

高 島「先輩、照合しましたけど
手帳とブローチ、2つに
共通するモノは
ありませんでした」

*以下、カットバック

速 水「そうか」

胸を撫で下ろす速水。

高 島「ただ、ブローチの方に
前科（まえ）のある
パターンが2つヒット
しました」

速 水「2つ？何者？」

高島「1つは片山準。

傷害が主です」

速水「・・・もう1つは？」

鎚木の声「いや、ちっぽけな

うかんむり（窃盗）

なんですけど名前は石田賢治

21歳」

速水「わかった。ありがとう」

通話を切り、

別の番号に掛ける。

鎚木の声「今度はなんです？」

速水「石田賢治という男の事、

署のデータベースで調べて

くれないか？前科（まえ）が

ある」

鎚木の声「あの、一般人になった

先輩の為にやるのは違法

なんですけど」

速水「固い事言うなよ」

鎚木の声「はあ」

速水「志保さんは？連絡ついた？」

鏑木の声「いや、電源切った

ままですね」

速水「そうか」

鏑木の声「暇見て自宅にも

行ってみますよ」

速水「助かる」

通話を切る。

49 真久公園

陽子と共に掃除用具を
手に歩く瞳。

2人の前に

宗祐が現れる。

宗祐「あの」

瞳「・・・」

陽子、只ならぬ

雰囲気を感じ、

陽子「先に帰るわね」

瞳 「あ」

陽子は

『いいのよ（笑）』と

いった表情を見せ、

2人を残し

行ってしまう。

向き合う2人。

瞳 「・・・お付き合いは

出来ないって

お断りさせてー」

宗 祐 「（遮り）お別れ

言おうと思っ」

瞳 「？」

宗 祐 「あ、ごめん！

付き合ってる訳でも

ないのに変な言い方して。

あの、俺もうここに

来れないんだ」

瞳 「・・・」

宗 祐 「でも、これだけはわかって

欲しくてさ。俺はやらされた
だけなんだ！」

瞳 「？」

宗 祐 「ごめん。訳わかんないよね。
それじゃ」

踵を返し、駆け出す

宗 祐。

瞳 「（見送って）」

×

×

×

歩く陽子。

陽 子 「？」

視線の先、

女性（志保）が

ホームレスや

公園関係者に

何やら聞いて

回っている。

やがて志保は、陽子に

気付きやってくる。

志 保「あの」

陽 子「はい？」

志 保「私、片山準の母でして」

陽 子「ああ、片山君の。」

彼、このところー」

志 保「（遮り）殺されました」

陽 子「え！？」

志 保「犯人を捜しています。

何かご存じないですか？」

陽 子「知ってる事って言われても

・ ・ ・ それ、

本当なんですか？」

志 保「・・・」

陽 子「私で力になれる事が

あったら、いつでも

言ってく下さい」

志 保「・・・ありがとう

ございます」

陽 子「連絡先、交換しましょう」

緊張した足取りで
やってくる宗祐。
署の建物が見える。
急に足が竦み、
立ち尽くす。

宗 祐「・・・」

香月が、突然前方から
やってくる。

宗 祐「？」

香月は何も言わず
近づいてくる。
そしてすれ違いざまー。

香 月「（小声）罰を受ける気に
なったんだな」

宗 祐「！？」

香月の後ろ姿を見送る
事しか出来ない宗祐。

宗 祐「……」

立ち番の警官が怪訝な
目を向ける。

警官「どうかした？」

宗 祐「！いえ……」

呼吸が荒くなる。
やがて踵を返し、
足早にその場を
去る宗祐。

5 1 宗祐のマンション

クロークを開け、
衣服などを慌てて
詰め込む宗祐。

宗 祐「いやだ……いやだ」

5 2 ファーストフード店内へ表

入口ドアに近い、

歩道に面した
カウンター席で
コーヒーを啜る速水。
スマホが鳴る。

速水「（出て）はい」

鏑木の声「石田賢治について

わかりました」

速水「で？」

鏑木の声「母親と2人暮らし。

住所は江戸川区。けど、
ひと月ほど前に
売り払ってます」

速水「？その後は？」

鏑木の声「転居届が出てないから

追えてないです」

速水「母親の名前は？」

鏑木の声「陽子です。47歳」

速水「！」

速水が走って

やってくる。

視線の先、瞳がいる。

瞳 「（気づいて）速水さん」

速 「瞳さん、あの人は？」

瞳 「あの人？」

速水の焦った様子に

怪訝な表情を

浮かべる瞳。

速 「陽子さんは？」

瞳 「え？先に帰りましたけど」

速 「え？」

瞳 「何かあったんですか？」

速 「彼女の“今の”

自宅わかる？」

瞳 「“今の？”……さあ、

住所とか聞いた事ないです」

速水は踵を返し、

早足でその場を去る。

瞳 「速水さん！」

×

×

×

早足で歩きながら

スマホを耳に当てる

速水。

数コールして岩本の

声が。

岩本の声 「はい、岩本」

速水 「俺です」

岩本の声 「俺？」

速水 「探偵です。速水です」

5
4 高尾東署 刑事課

安物スチール椅子に

座り、通話している

岩本。

岩本 「ああ、あなたか。」

なんだよ？」

*以下、カットバック

速 水「そちらに松丸宗祐って

男が出頭しましたか？」

岩 本「あ？誰だ、そいつは？」

速 水「殺しに関与してる人間です」

岩 本「殺し？2つの

事件（ヤマ）のか？」

速 水「無関係じゃありません」

岩 本「ただ、あの事件（ヤマ）は

大方、戸川絹江の犯行って

事で裏、取り始めてるぞ」

速 水「絹江？絹江ってー」

岩 本「ああ。神田の死体と

一緒に死んだ奴だ」

速 水「それは早急です」

岩 本「どういう事だ？」

速 水「磯野、神田の仲間である

松丸を殺す可能性のある

人間がまだいるって事です」

岩 本「おい！意味がわかんねえよ」

速 水「とにかく、そちらに松丸は

出頭してますか？」

岩 本「ちよっと待て」

速水の耳に、岩本の

叫び声が響く。

やがて、

岩 本「こっちは出頭してない」

速 水「まずい。今から言う住所に

来てください。

あと、石田陽子という女性の

住所（ヤサ）を

洗ってください」

岩 本「誰だ、それ？」

速 水「恐らく犯人（ホシ）です」

岩 本「恐らく？おい、憶測で

動くんじゃないよ」

速 水「何もしないより

いいです」

岩 本「ちっ。わかったよ」

速

水「元は江戸川区ですが、

現在の住所（ヤサ）は不明。

高尾市に住んでるとは

思うんですが」

岩

本「わかった」

5
5

宗祐のマンション 部屋前

速

水「おい、まだいるか！！？」

チャイムを鳴らす速水。

応答は無い。

嫌な予感に

囚われる速水。

速

水「くそっ」

ポケットから

ピッキングツールを

取り出す。

5
6

同室内

『ガチャリ』。

乱暴にドアの開く

音の後、速水が

駆け込んでくる。

速水「！」

室内は無人。

一瞬、安堵する速水。

クロークが

開きっぱなし、

カラーボックスから

衣服が散乱しており、

旅行カバンもない。

速水「どこ行ったんだ？」

辺りを見回す。

速水「？」

視線の先、

サイドボード上の写真。

×

×

×

宗 祐「……山中湖の貸別荘」

×

×

×

宗祐たちの3S写真。

速 水「ここだ」

スマホが鳴る。

速 水「（出て）母さん」

時子の声「病院、抜けだし

たんだって？

何考えてるのよ！？」

速 水「母さん、今その話は無し。

急いでるんだ」

時子の声「急いでるって何を？

また危ない事してるんじゃないや

ないの？やめなさい！」

速 水「やらなきゃいけないんだよ。

人の命が奪われてるんだ」

時子の声「あなたの命が

奪われたら？

私はどうすんの？」

速水「……今、“たら、れば”
の話はー」

時子の声「（遮り）もう好きに
しなさい！」

通話が切れる。

速水「……」

黒パトのサイレンが
聞こえる。

5
7 走る黒パト

岩本「山中湖だと？」

ハンドルを握る
岩本が隣の速水に
目をやる。

速水「ええ」

岩本「で、その松丸ってのが
仲間と一緒にホームレスを
攫って闇に流してた。

で、その被害者の中に

石田陽子の息子がいたって

わけか」

速 水「ええ」

岩 本「そーいや、あの絹江って女、
逃亡中の身だったぞ」

速 水「え？」

岩 本「殺人未遂だ。そんな
奴だから犯人（ホシ）で確定

させてたんだがな」

速 水「・・・危ない！」

対向車と
ぶつかりそうになる。

岩 本「うおっ！」

慌ててハンドルを
切る岩本。
事なきを得る。

速 水「・・・運転上手く

ないですね」

顔を赤らめる岩本。

岩 本「久しぶりだから

しょーがねーだろ！」

速 水「いつも一緒にいる彼は？」

岩 本「須永か？石田陽子の

住所（ヤサ）を洗わせてる」

速 水「ありがとうございます」

岩 本「ったく。引っ掻き

回してくれるぜ」

5
8 山中湖 情景（夕）

富士山の下、

湖面が夕陽に

照らされている。

5
9 潇洒な別荘 表

『わ』ナンバーの

SUVが停まっている。

吹き抜けの高い天井。

木目を基調とした

質のいい室内。

カーテンも閉め切り、

薄暗い室内。

ソファの上で膝を

抱える宗祐。

宗祐「・・・」

『カチン』。

リビングの中庭に

面した窓から音がする。

宗祐「（ビクッ）！？」

恐る恐る窓に近づき、

カーテンを薄く開ける

宗祐。

宗祐「！？」

窓の外、ウッドデッキ

の向こうに夕陽に

照らされたウサギが
立っている。

宗 祐 「！？」

車のスマートキーを
手にし、急いで
玄関へ走る宗祐。
ドアを開ける。

宗 祐 「！？」

目の前に立って
いるのは瞳。

宗 祐 「ど、どうして？」

瞳 「・・・」

瞳が後ろ手に隠した
スパナで宗祐の
こめかみを殴りつける。

宗 祐 「ぐあっ！」

後ろに吹っ飛び、
尻もちをつく宗祐。

宗 祐 「わあああっ！」

血が流れ出る額を

押さええ、パニックに

陥る宗祐。

瞳の背後から

ウサギが現れる。

宗祐「！」

ウサギは宗祐に近づく。

宗祐「ま、待って！何なんだよ、

あんたら！！」

宗祐を悠然と見下ろし、

手にしたグルカナ이프

を突き出す。

宗祐「！！！」

しゃがみ込み、宗祐の

首元に横にした

ナイフを当てるウサギ。

宗祐「！！ゆ、許して

ください……」

岩 本「そうか、わかった」

スマホの通話を
切る岩本。

岩 本「石田陽子の住居（ヤサ）が

判明して訪ねたが、

不在の様だ」

速 水「・・・」

やがて、別荘が見える。

速 水「！？」

玄関の向こう、

女（瞳）の後ろ姿、

その奥に人影が2つ

見える。

黒パトが急停車する

前に助手席から

飛び出す速水。

岩 本「おい！」

玄関に飛び込む速水。

瞳が振り向く。

こちらに気付いた

宗祐は尻もちをついたまま震えている。

速水「！？瞳ちゃん？なんでー」

『ガシャーン！』
リビングの方で
ガラスが派手に
割れた音。

速水「！？」

速水目掛けて
瞳がスパナを振る。
それを躲し、
スパナを持つ右手を
押さえる速水。

速水「やめるんだ！」

瞳は闇雲に暴れる。
岩本が現れ、瞳の
首根っこを掴み、
一気に引き剥がす。
瞳は凄いい勢いで
玄関外に放り出される。

速

水

「やりすぎですよ！」

岩

本

「はあ！？助けて

やっただろ！」

速水はリビングへ。

速

水

「！」

リビングの窓ガラスが

床に散らばっている。

外に飛び出す速水。

6

2

同

傍

辺りを見回す速水。

視線を感じ、

目をやる先に

ウサギが立っている。

こちらをジッと見て。

速

水

「もうよせ！」

手に何か持っている。

サッカーボール

ぐらいの大きさの

黒いビニール袋が3つ。

速水「！！！」

それを速水に向けてかざす。

速水「？」

ウサギは傍にある車に乗り込み、発進する。

6
3
同 玄関

速水が戻ってくる。岩本が制圧している瞳に近づく。

速水「彼女は真久公園に戻ったんだね！？」

無表情の瞳。

瞳「好きにさせてやって」

速水「（岩本に）ここは
お願いします」

岩 本「あ？」

駆け出し、エンジンが

掛かったままの

黒パトに

乗り込む速水。

岩 本「あ、おい！」

黒パトが急発進する。

6
4 走る黒パト（夜）

ハンドルを握る速水。

ハッとする。

×

×

×

絹 代「人間の頭を4つ埋めると

自分の大切な人が生き返る

んだ」

×

×

×

速水「……………」

6 5 真久公園 前

黒パトが急停車し、
速水が降りる。
園内へ駆け込んでいく。

6 6 同 高台入口

やってくる速水。

速水「？」

入口に香月が
立っている。

香月「……………」

速水は駆け足で
山道を駆け上がって
いく。

香月「……………」

逆さ帚のたもと、
深い穴が掘られる。
そこへ準たち3つの
頭部が置かれる。
樹を仰ぎ見る
ウサギの後方、
速水がやってくる。
ウサギはゆっくり
立ち上がり、
速水に目をやる。
やがて、ゆっくり
マスクを外す。
マスクの下は――陽子。
速水「石田賢治君の
お母さんですね？」
無表情の陽子は
答えない。

速 水「逆さ帚の伝説。

頭部は4つ必要

なんですよね？

松丸を殺す事は出来なかった。

もうこれ以上は無理です」

グルカナイフを

手にする陽子。

速 水「・・・4つ目は俺、

ですか」

ポケットに

手を突っ込む速水。

ウサギが迫る。

ナイフを躲す速水。

執拗に刃先が迫る。

ブラスナツクルを

嵌めた右拳を繰り出す。

眼前に迫っていた

ナイフにヒット。

ナイフが弾け飛ぶ。

痺れる右手首を押さえ、

後退る陽子。

速水「もうやめましょう」

陽子は速水を

見据えたまま

右方へジリジリと動き、

逆さ帚から離れていく。

そんな陽子に

近づく速水。

右足を踏み込んだ瞬間、

何かを踏んだような

違和感を感じる。

速水「？」

次の瞬間、右足に

太いワイヤーが

巻き付く。

速水「ぐあっ！？」

左膝をつき、ワイヤー

の出所を探る速水。

2メートルほど先の

樹の太い幹に

括られている。

* 狩猟用括り罠

速 水「くそっ」

速水から十分に距離をとった陽子が踵を返し、離れた場所に放られたナイフを取り上げると悠然と速水に近づく。

速 水「！！！」

速水の喉元にナイフの切っ先を突きつける陽子。

速 水「よせ！こんな事して、

本当に息子さんが戻ると思ってるのか！？」

柔らかく笑う陽子。

陽 子「あの子は私の大切な

息子だったの。あの子の為なら何でもするわ」

速 水「・・・・・・・・」

ナイフを振り上げる
陽子。

速 水「！！！」

速水の視界、唐突に
陽子の首が鮮血と
共に吹き飛ぶ。

速 水「！！？」

頭を失くした身体が
ゆっくり横倒れる。
その向こうにいるのは

速 水「志保さん！？なんで

(ここに)」

志 保「準の仇よ」

返り血を浴びた
志保が無表情で呟く。

速 水「・・・・・・・・」

志保は、陽子の
頭部を手にすると、

速水の元から離れ、
逆さ帯へ。

速水「？」

そして、準たちの
頭部がある穴に
それを放る。

速水「！！！」

68 真久公園（回想＊S41 続き）

陽子「連絡先、交換しましょう」

志保「・・・」

スマホを出す陽子。

陽子「番号、教えてください」

志保もスマホを出し、
画面に自分の番号を
出す。

陽子は自分のスマホに
志保の番号を打ち込む。

陽子「私も子供を失くしたから、

あなたの気持ちわかります」

志保「？」

陽子「知っています？この公園の

高台にある樹の下に

人間の首を4つ埋めると

人を生き返らせる事が

出来るんです」

志保「・・・」

陽子「私も犯人、捜しますから、

絶望しないで」

志保「・・・」

69 高台上（現在）

志保「準、準・・・」

4つの頭部に

土を掛ける志保。

速水「（呆然）」

志保は必死に土を

掛ける。

志保「お願いよお・・・」

穴が土で塞がる。

逆さ帚を見上げる志保。

静寂のみ。

静寂だけが続く。

志保「・・・」

鉦を自分の首に

当てる志保。

速水「志保さん！駄目だ！！」

ワイヤ―を外そうと

もがく速水。

だが、外れる

わけがない。

志保「準・・・」

鉦を持つ手に力を

込める志保。

速水「志保さん！！」

志保の手を誰かの手が

掴む。

速水「？」

対峙する速水と香月。

香月「呼び立ててすまんね」

速水「いえ」

香月「……片山の母親は？」

速水「……今は病院にいます」

香月「そうか」

速水「現状、志保さんが

唯一話してるのは、あの晩

彼女を呼び出したのは、

陽子さん本人だったと

いう事です」

香月「……」

速水「自分が殺した男の母親を

なんで呼び出した

んでしょう？」

香月「同じ母親、だから

じゃないかな」

速水「……やはり、

あなたは全てを

知ってたんですね？」

香月「……」

速水「瞳ちゃんのトコにも

行ってきました」

7 1 同 園内

ベンチに腰掛ける

速水と香月。

香月「賢治がここに来たのは

3か月前だ」

7 2 同 (回想)

香月の声「それ以前も色んな

所を彷徨ってたらしい」

ホームレスが並ぶ

炊き出しの列。

カレーライスを盛る

香月。

隣には瞳もいる。

香 月 「数日来て、慣れたかい？」

瞳 「はい、なんとか（笑）」

盆を手にした新太が

2人の前に立つ。

新 太 「ご飯はそんなに要らない」

香 月 「駄目だよ、沢山食べなきゃ」

と、新太の後ろに

並ぶ青年、

石田 賢治（21）に

気付く。

香 月 「見ない顔だね？」

男 「……すみません」

賢治が頭を下げる。

香 月 「（笑って）謝る事はないよ」

瞳 「どうぞ」

カレーを賢治に渡す瞳。

ペコリと頭を下げる

賢治。

パイプ椅子に座る速水。
アクリル板の間仕切り
の向こうには同じく
パイプ椅子に座った瞳。

瞳

「賢治さんは、しばらく

あの公園にいました。

でも、あまり他の人とは

話さず、いつも1人でした。

そんな時、唯一彼に親身に

なっていた香月さんが」

7
4

真久公園（回想）

買い物袋を持って

歩く瞳。

ふと、足を止める。

視線の先、ベンチに

並んで座る香月と賢治。

香月 「なあ賢治。こんな事

聞くの野暮かもしれないが、
親は？」

賢 治「……母がいます」

香 月「なら、お袋さんの元へ

帰ったらどうかかな？」

賢 治「……帰れません」

香 月「なんで？ 勘当でも

されたのか？」

賢 治「僕が父を殺して

しまったんです。

悲しむ母を見るのが辛くて」

香 月「？」

賢 治「車の事故で。

僕が運転していて、

助手席にいた父を……」

そこへ、コップ酒を

手にした絹江が現れる。

絹 江「私は、娘を飲酒運転の

車に殺された」

賢 治「……」

絹 江「お父さんに会いたいかい？」

賢 治「はい。でも、そんな事

無理ですけど」

絹 江「無理じゃない」

賢 治「え？」

高台の上、逆さ帚を

見上げるかおる。

絹 江「けど、相当の覚悟がいる」

賢 治「覚悟？」

絹 江「そう。4つの人の頭を」

香 月「（遮り）絹江さん、

よしなよ！

（賢治に）ちよつとこの人、

オカルト好きっていうか

変わり者で変な事ばっか

信じてんだよ」

不満そうな表情で、

酒を呷る絹江。

香 月「（ため息）そんな事より、

お袋さんは君の事を

恨んでるのか？」

賢 治 「・・・いえ。母が

僕を責める事は

ありませんでした。

それが逆に辛くて」

香 月 「それでも、帰ってやれ」

賢 治 「・・・」

×

×

×

* 時間経過

公衆電話で

話している賢治の

背中を見守る香月と

傍で酒を飲む絹江。

そこへ、紙袋を

手にした準・絢斗・

浩・宗祐が現れる。

香 月 「片山君、買い出しお疲れ様」

準 「（会釈して）絹江さん、

また昼間っから酒？」

準 「酒屋の前に品卸しの

カゴがね」

笑う準たち。

香 月 「この前差し入れたろ？」

ダメだよ、そんな事しちゃ」

準 「（笑って）そんじゃ」

去っていく準たちと

入れ替わる様に

賢治が戻ってくる。

*さりげなく賢治を

見やる準たち。

絹 江 「じゃ、私も行くよ」

絹江もその場を去る。

香 月 「お袋さん、何だって？」

賢 治 「（恥ずかしそうに）今夜、

帰ります」

香 月 「（笑って）お袋さん、

喜んでたか？」

賢 治「……はい（笑）」

香 月「（安堵して）よかった」

ポケットから

何かを取り出す賢治。

香 月「（見て）それは？」

賢治の掌には

薄紫色のブローチ。

賢 治「母の誕生日に

買ったんですけど、

渡せぬまま家を

飛び出してしまったので」

香 月「素敵なブローチだな」

賢 治「（笑って）帰ったら

改めて渡します」

香 月「（笑って）」

そんな様を遠くから

見つめている瞳。

瞳 「（笑って）」

瞳 「それから数日が経った頃、

陽子さんがあの公園を

訪ねて来たんです」

7
6

真久公園（回想）

ボランティア活動を
する香月と瞳の元へ
女性（陽子）が
やってくる。

陽子 「あの、突然すみません。

石田賢治という人を

探してるんですが」

瞳 「？」

香月 「？賢治君の

お母さんですか？」

陽子 「（驚き）え？はい。

賢治の母で石田陽子と

います」

香 月「お母さんの元へ

帰ると言っていましたか

戻ってませんか？」

陽 子「・・・ええ。ここに

いると本人が言っていたので

（来たんです）」

顔を見合わせる

香月と瞳。

×

×

×

* 数日後

香月、瞳ら

ボランティアに混じり、

炊き出しを手伝う陽子。

瞳 「陽子さん、もう大夫

慣れた感じですね（笑）」

陽 子「まだまだよ。けど・・・」

香 月「ああ。ここにいれば、

賢治君に会えるさ。

きつと照れ臭くなっただよ

陽子「・・・はい」

7 7 真久公園（現在）

香月「彼女は賢治の

帰りを待った。だが」

7 8 同（回想）

瞳らと共に炊き出しを

行う香月が

ふと目をやると、

離れた場所で準が

見覚えのある

何かを若い女に

渡そうとしているのが

見える。

香月「？」

駆け出す香月。

瞳

「香月さん？」

×

×

×

準の元へやってくる

香月。

香

月「おい」

準

「？」

準が女に渡そうと

しているのはブローチ。

香

月「それ、どうした？」

準

「は？」

一瞬、口詰まる準。

香

月「それは君のモノじゃ

ないな？」

女が醒めた目を準に

向ける。

女

「は？ どういう事？」

準

「いや・・・」

女

「どうりでね。そんなラッピングもされてないモノ、おかしいと思ったのよ」

女は手を振り、その場を去る。準は、香月を恨めしそうに見る。

香

月「それは賢治のモノだ。なぜ、君が持ってる？」

準

「……もらったんすよ」
月「賢治から？そんな筈はない。

それは彼がお母さんに渡そうとしてたモノだ」

準

「ちっ」
小さく毒づくと、ブローチを香月に押し付ける様に渡し、その場を離れる。後を追う香月。

香

月「待ってくれ。賢治の居場所、

知ってるんじゃないのか？」

準 「知らないすよ」

準の上着の袖を

掴む香月。

香月 「離してくださいよ！」

香月 「教えてくれ、頼む。

でなきゃ、君を窃盗の罪で」

準 「（遮り）脅すんすか？」

香月の腕を振り払う準。

ポケットから煙草を

出し、啜えるや

火を点ける。

準 「俺は知りませんよ。

まあ今頃、世の為人の為にも

ならないホームレスが

何かの役に立っていると

いいですよね」

香月 「なに？」

沼田 「知ってます？年寄りで

身体の悪い大金持ちが、

若くて健康な人間の
臓器を闇で買い取るって話」

香 月「！？」

沼 田「あと、医療研究者が
医学の発展の為なんて
大義名分で、切断した四肢を
高い金払って集めてるって
話もあるらしいですよ」

香 月「（ゾツとして）まさか？」

準 「やだな。そういうのって
身寄りの無い若い人間が
狙われるから彼も
そうなってなきやいいな、
って話ですよ」

香 月「・・・まさか、君は
身寄りの無い若者を
見繕う為にボランティアを？」

準 「あ？（凄み）おいおい。
証拠も無いのに変な事
言うと訴えますよ？」

香 月「……」

準 「それより俺は、

あんたが親身になってる

絹江さんが警察に

追われてんの

知ってるんすけど」

香 月「！」

準 「（笑って）娘を

酔っ払い運転で殺した奴。

そいつの出所後に包丁で

襲って殺しかけた

んですよね？

そんで今は、ホームレスに

身を落として姿を隠してる」

香 月「……」

準 「あんたがバカな事言うなら、

こっちも出るトコ出ますよ？」

悪びれる事無く、

去っていく。

そこへ、絹江が

やってくる。

香月「（驚いて）絹江さん」

絹江「・・・全部聞いたよ」

香月「俺がなんとかする。」

だからあいつの事は

黙っておくんだ。

あんたの為、そして

陽子さんの為にも」

絹江は何も言わずに

その場を去る。

79 拘置所 面会室

瞳「でも、絹江さんは

その事実を陽子さんに

話しました」

80 真久公園 一角（回想）

香月の元へやってくる

瞳。

瞳 「香月さん」

香 月 「やあ、おはよう」

瞳 「陽子さん、見てませんか？」

香 月 「まだ来てないのか？」

瞳 「みたいです」

そこへ、陽子が

香月たちの元へ

やってくる。

瞳 「陽子さん、おはよう

ございます」

陽子は答えない。

瞳 「？」

香 月 「？」

冷たい目で香月を

見る陽子。

陽 子 「片山準が息子を

殺したんですってね」

香 月 「！？」

瞳 「え？」

絹江が傍を通りかかる。

香月「絹江さん！あんた、まさか！？」

絹江を睨む香月。

香月「言うなっって言っただろ！？」

「なんでこんな馬鹿な事を！？」

絹江「私は、この人の為に

教えただよ」

陽子「どうなんですか？」

香月「・・・」

苦渋の表情で

ポケットから

ブローチを出す香月。

香月「・・・賢治君が、

あなたに渡そうとてたモノだ」

震える手で

受け取る陽子。

陽子「（見て）」

香月「陽子さん、こうなったら

警察へ行こう。片山を

逮捕してもらうんだ」

陽子「証拠は無いんですよね？」

それに、そんな事したら

絹江さんが。なにより」

香月「？」

陽子「警察なんか

渡したら駄目ですよ」

香月「……」

陽子「賢治は大丈夫ですから」

香月「え？」

香月たちの元から去る

陽子。

香月「陽子さん！」

陽子は答えず高台の

入口に向かう。

香月「？」

絹江に目をやる香月。

香月「あんた、まさか？」

絹江「……」

香月は陽子の後を追う。

瞳

「（絹江に）あの、どうい
う事ですか？」

×

×

×

公園上の高台。

息を切らし、

やってくる香月。

視線の先、陽子が

『逆さ帚』に

魅入っている。

陽

子「待っててね。

お母さんが必ず……」

香

月「（愕然）！！」

瞳もやってくる。

瞳

「……」

悲しげな目で陽子を

見つめる瞳。

何も無い室内。

正座して俯く陽子。

床には、幼い頃からの

賢治の写真が何枚も。

陽子「・・・」

チャイムが鳴る。

陽子は反応しない。

瞳の声「陽子さん、瞳です」

陽子「・・・」

×

×

×

ドアを開けると、

瞳が立っている。

×

×

×

向かい合って座る

陽子と瞳。

瞳 「全部聞きました」

陽子 「……」

床の写真に目をやる

瞳。

写真の中、幼い賢治が

ウサギのぬいぐるみを

持って笑っている。

陽子 「ウサギが、好きだった

子でね」

瞳 「……私に手伝える事、

ありますか？」

8
2
拘置所 面会室

速水 「君も、あの伝説

信じてるのかい？」

瞳 「いいえ」

速水 「？じゃあなぜ、彼女の

犯行を手伝ったんだい？」

瞳 「同じ母親だから」

速

水「？」

瞳

「といても、

なり損ねたんですけど」

虚ろな目で遠くを

見つめる瞳。

瞳

「妊娠してたんです。

私は生みたかったけど、

共に学生だった彼は

動揺するばかりで。

彼の親や自分の親、

みんなに大反対されました。

それでー」

速

水「（察して）・・・」

瞳

「彼と別れて大学も辞めて、

産んであげれなかった

あの子に許しを請う様に

ボランティアを始めたんです」

速

水「・・・」

瞳

「子供を失う母親の気持ち。

私にだって痛い程

わかりますよ」

8 3

真久公園 高台（回想…夜）

瞳がやってくる。
その後、準が続く。

準 「なに？急に話して？」

ニヤける準。

瞳 「会って貰いたい人がいるの」

準 「会って“貰う”？」

怪訝な表情の準。

逆さ帚の陰から、

ウサギが現れる。

準 「（見て）あ？」

ウサギはゆっくり準に

近づく。

準 「おい、これってどういうー」

瞳に視線を戻した刹那、
スパナで頭を殴られる。

準 「ぐあっ！」

倒れる準。

血が流れ出す頭を

押さええる。

準 「な、何すんだ！？お前――」

冷たい目で準を

見下ろす瞳。

瞳 「賢治さんを攫ったでしょ？」

準 「！ち、違う！！」

俺だけじゃねえ！！」

言ってハツとする準。

瞳 「（考えて）いつも

一緒にいる3人ね？」

準 「・・・」

突如、走り込んで来た

ウサギがグルカナ이프

を準の首に突き立てる。

準 「！！」

ナイフを抜くウサギ。

今度は両手で

血が溢れ出る

準

「ひゅく、ひゅく・・・」

首を押さえながら

ジタバタする準。

何か言おうとするが、

言葉にならない。

地を這い摺り、

その場から離れようと

する準。

それを悠然と追う

ウサギ。

やがて追いつくと

準の背中に跨る様に

立ち、ナイフを

突き立てる。

準

「！！」

目をひん剥き、

絶命する準。

×

×

×

『ゴリ、ゴリ．．．』

準の身体に馬乗りに

なったウサギが

その首に当てた

グルカナ이프を

往復させる。

その傍らで見ている瞳。

そこへやってくる香月。

ウサギと瞳が振り返る。

香月「（啞然）」

84

真久公園 園内（現在）

香月「あの日、彼女がああ男を

呼び出すのをたまたま

見かけてね。気になって

行ってみたんだ」

速水「．．．俺が見た死体を

隠したのは」

香月「（遮り）ああ、私が

手伝った。よく気づいたね」

速 水「2つの死体を

女性2人だけじゃ、

とても運べやしませんから」

香 月「（頷き）」

速 水「止めようとは

思わなかったんですか？」

香 月「頭じゃ思ったさ。けど、

心はそれを許さなかったよ」

速 水「・・・」

8 5 拘置所 面会室（現在）

速 水「絹江さんは、神田浩と

刺し違えたんじゃない。

彼を殺したのは陽子さんで

絹江さんは神田に殺された」

瞳 「（頷き）」

8 6 廃墟ビル 中（回想）

（瞳の）主観。

階段を静かに上り、

2階に出ると、

浩の背中が見える。

その足元には、胸から

血を流し、倒れている

絹江の姿。

気配を感じ、浩が

振り返る。

顔には汗がべっとり。

浩 「！あなたは・・・」

対峙する瞳と浩。

浩 「こ、この女が

襲ってきたんだ！

俺は正当防衛しただけだ！」

瞳 「・・・」

浩がポケットナイフを

握る手に力を込める。

瞳 「（見て）私も殺すの？」

浩

「・・・あなた次第だ」

サークルを描くように

ゆっくり動く瞳。

瞳と正対を保ったまま

動揺に動く浩。

やがて、瞳が今やって

来た階段を背にした

ところで動きが止まる。

浩

「黙ってるなら殺しはしない」

瞳

「黙るのはあなたの方」

浩

「？」

急速に階段を

駆け上がる足音。

浩

「？」

振り返る浩の胸元に

グルカナイフを

突き立てるウサギ。

浩

「！！！」

ナイフが胸に

刺さったまま、

仰向けに倒れる浩。
ウサギはその身体に
馬乗りになり、
ナイフを引き抜くと
今度は横にした刃を
クビに押し当てる。
『ブシュ！！』
ウサギのマスクに
返り血が。

×

×

×

絹江の傍らに立つ
ウサギと瞳。
絹江が薄っすらと
目を開ける。
ウサギのマスクを取り
素顔を見せる陽子。

絹江「……殺ったんだね？」
陽子「（頷き）絹江さん、わざと

囧に・・・」

小さく笑う絹江。

絹江「あなたには最後まで

やって欲しいからね」

陽子「・・・」

絹江「私は娘を殺した男を

殺し損ねたから」

陽子「・・・」

絹江「あなたには勇気を貰った。

あなたの後には

今度こそ私も・・・」

陽子「(笑って)」

頷く絹江。

絹江「行きなさい。ここは私が」

ゆっくり目を

閉じる絹江。

陽子「絹江さん？」

返事は無い。

瞳「・・・」

陽子「私は、必ず叶えるから」

香 月「誰だってこんな事、

バカらしいと思うよな？

笑い飛ばすよな？」

速 水「・・・」

香 月「けど、他人にどう映ろうが

それが叶わなくて

無駄な事だと

分かってても彼女は

こんな希望に

縋るしかなかったんだ」

速 水「・・・あの晩、彼女が

志保さんを呼んだのは」

香 月「自分を殺させる

為に呼んだらろう」

速 水「・・・陽子さん、いえ

母親ってのは凄いですね」

香 月「ああ」

立ち上がる香月。

香月「じゃあ、私は行くよ」

速水「……出頭する

んですね？」

香月「ああ。君に全て話したら

スツキリした。それじゃ」

手を上げ、

去って行く香月。

8 8 拘置所 面会室

刑務官がやってくる。

立ち上がる瞳。

速水「あ。待って」

瞳「？」

速水「これ、陽子さんの」

ポケットから

ブローチを出す速水。

瞳「その花、シオンって

いんです。陽子さんから

教えて貰って私も好きに」

速 水「そっか。これ、差し入れ
しとくから。君が持ってた」

頭を下げ、踵を返す瞳。

瞳 「シオンの花言葉、
知ってます？」

振り返りも

せずに言う瞳。

速 水「？いや」

瞳 「『追憶』です」

刑務官と共にドアの

向こうに消える瞳。

速 水「・・・」

8
9 真久公園 高台入口

高台を見上げる速水。

速 水「・・・」

ポケットからスマホを
出す。

速

水

「あ、

母さん？俺だけどー」

向け、歩き出す。

耳に当たると出口に

画面に指を滑らせ、

E
N
D